

演習問題 5.2 補題 5.8 及び命題 5.7 を証明せよ。

補題 5.8 : 最初に「あるゼロでないベクトル x が存在して $Bx = 0$ ならば $\det(B) = 0$ 」を示す。結論を否定すると $\det(B) \neq 0$ なので B には逆行列 B^{-1} が存在する。 $Bx = 0$ の左から B^{-1} をかけると、 $B^{-1}Bx = B^{-1}0 = 0$ であるが、 $B^{-1}B = E$ なので $B^{-1}Bx = x$ となり $x = 0$ となるが、これは矛盾である。

次に「 $\det(B) = 0$ ならばあるゼロでないベクトル x が存在して $Bx = 0$ 」を示す。行列 B のサイズを n とすると $B = (b_1 \dots b_n)$ と書ける。 $\det(B) = 0$ より $\text{rank}(B) < n$ となり、 b_1, \dots, b_n は 1 次独立ではない。よってスカラー x_1, \dots, x_n が存在して

$$x_1 b_1 + \dots + x_n b_n = 0$$

となる。 $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ とおくと、 $x_1 b_1 + \dots + x_n b_n = (b_1 \dots b_n)x = Bx$ となるので証明が終る。

命題 5.7 : λ を $\Phi_A(t) = 0$ の解で $\lambda \in \mathbb{K}$ とする。このとき $\det(\lambda E - A) = \Phi_A(\lambda) = 0$ なので補題 5.8 より、あるゼロでないベクトル x が存在して $(\lambda E - A)x = 0$ となる。このとき $Ax = \lambda x$ となるので、 λ が A の固有値である事が分かる。

逆に λ が A の固有値のとき、定義から $\lambda \in \mathbb{K}$ であり、ゼロでないベクトル x が存在して、 $Ax = \lambda x$ となる。 $\lambda x = \lambda Ex$ なので、 $(\lambda E - A)x = 0$ となり、 $\Phi_A(\lambda) = 0$ となる。

演習問題 5.3 次の行列の固有値固有ベクトルを求めよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \qquad (2) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$(1) A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \text{とおく。固有方程式は } \Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^4 = 0 \text{ なので、固有}$$

値は 0 である。0 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、 $y = z = w = 0$ が成立して

いる。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして $x = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$

を選ぶことが出来る。

(2) $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とおく。固有方程式は $\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^4 - 1 = (t-1)(t+1)(t^2+1) = 0$ なので、 $\mathbb{K} = \mathbb{C}$ と $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ の場合に分ける必要がある。最初に $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ の場合を

考える。このとき固有値は $1, -1$ である。1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、

$x = y = z = w$ が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ x \\ x \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有

ベクトルとして $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。-1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$

とすると、 $x = -y = z = -w$ が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ -x \\ x \\ -x \end{pmatrix}$ の形をして

いる。特に固有ベクトルとして $v_2 = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。

次に $\mathbb{K} = \mathbb{C}$ の場合を考える。このとき固有値は $1, -1, i, -i$ である。1 及び -1 に対応する固有ベクトルは $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ の場合と全く同じである。 i に対応する固有ベを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、

$y = ix, z = iy, w = iz, x = iw$ が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ ix \\ -x \\ -ix \end{pmatrix}$ の形をし

ている。特に固有ベクトルとして $v_3 = \begin{pmatrix} i \\ -1 \\ -i \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。 $-i$ に対応する固有ベクトル

を $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると, $y = -ix, z = -iy, w = -iy, x = -iw$ が成立している。よって固有

ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ -ix \\ -x \\ ix \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして $v_4 = \begin{pmatrix} -i \\ -1 \\ i \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶこと

が出来る。

(3) $A = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とおく。固有方程式は $\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^4 - 2t^2 + 1 = (t -$

$1)^2(t+1)^2 = 0$ なので固有値は $1, -1$ である。 1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると,

$w = x, z = y$ が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ y \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に 1 次独立な

固有ベクトルとして $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。 -1 に対応する固有ベクトル

を $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると, $w = -x, z = -y$ が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ -y \\ -x \end{pmatrix}$

の形をしている。特に 1 次独立な固有ベクトルとして $v_3 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶこと

が出来る。

演習問題 5.4 命題 5.9 を証明せよ。

A が対角化可能であるとする。 P を正則行列で、 $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix}$ となるものと

する。 $P = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n)$ とおくと、 $AP = P \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix}$ となる。 $AP = A(\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) =$

$(A\mathbf{u}_1 \cdots A\mathbf{u}_n)$ かつ $(\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix} = (\lambda_1\mathbf{u}_1 \cdots \lambda_n\mathbf{u}_n)$ より、各 i ($i = 1, \dots, n$)

について $A\mathbf{u}_i = \lambda_i\mathbf{u}_i$ となる。また P が正則なことから $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$ は 1 次独立である。各ベクトル \mathbf{u}_i がゼロベクトルになることはない。よって $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$ は 1 次独立な固有ベクトルである。

逆に n 個の 1 次独立な固有ベクトル $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$ が存在するとする。 $P = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n)$ とおくと、 P は正則である。また

$$\begin{aligned} AP &= A(\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n) = (A\mathbf{u}_1, \dots, A\mathbf{u}_n) \\ &= (\lambda_1\mathbf{u}_1, \dots, \lambda_n\mathbf{u}_n) = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n) \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix} \end{aligned}$$

なので、 A は対角化可能である。

演習問題 5.5 次の行列が対角化可能かどうか調べよ。ただし \mathbb{K} は実数の場合と複素数の場合の 2 通りの場合を調べよ。

(1) $\begin{pmatrix} 3 & 1 & 1 \\ 1 & 3 & 1 \\ 1 & 1 & 3 \end{pmatrix}$

(2) $\begin{pmatrix} 0 & -2 & -1 \\ 1 & 3 & 1 \\ 2 & 2 & 3 \end{pmatrix}$

(3) $\begin{pmatrix} -1 & -2 & -1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 2 & 2 & 2 \end{pmatrix}$

(4) $\begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$

(5) $\begin{pmatrix} 1 & 0 & -2 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & -1 & -1 \end{pmatrix}$

(6) $\begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & a & 1 \\ 0 & 0 & b \end{pmatrix}$

(1) $A = \begin{pmatrix} 3 & 1 & 1 \\ 1 & 3 & 1 \\ 1 & 1 & 3 \end{pmatrix}$ とおく。固有方程式は

$$\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^3 - 9t^2 + 24t - 20 = (t - 5)(t - 2)^2 = 0$$

なので、固有値は 5, 2 である。よってこの問題では \mathbb{K} が実数か複素数かを区別する必要はない。

5 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$3x + y + z = 5x$$

$$x + 3y + z = 5y$$

$$x + y + 3z = 5z$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ x \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

2 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$3x + y + z = 2x$$

$$x + 3y + z = 2y$$

$$x + y + 3z = 2z$$

が成立している。これは 3 式とも $x + y + z = 0$ なので, $x + y + z = 0$ をみたすベクトルは 2 に

属する固有ベクトルとなる。特に固有ベクトルとして $\begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

$P = \begin{pmatrix} -1 & -1 & 1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ とおくと $P^{-1} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} -1 & -1 & 2 \\ -1 & 2 & -1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$ であり

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 2 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 5 \end{pmatrix}$$

と対角化できる。

(2) $A = \begin{pmatrix} 0 & -2 & -1 \\ 1 & 3 & 1 \\ 2 & 2 & 3 \end{pmatrix}$ とおく。固有方程式は

$$\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^3 - 6t^2 + 11t - 6 = (t-1)(t-2)(t-3) = 0$$

なので, 固有値は 1, 2, 3 である。よってこの問題でも \mathbb{K} が実数か複素数かを区別する必要はない。

1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$0x - 2y - z = x$$

$$x + 3y + z = y$$

$$2x + 2y + 3z = z$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ 0 \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

2 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$0x - 2y - z = 2x$$

$$x + 3y + z = 2y$$

$$2x + 2y + 3z = 2z$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ x \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

3 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$0x - 2y - z = 3x$$

$$x + 3y + z = 3y$$

$$2x + 2y + 3z = 3z$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ x \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

$$P = \begin{pmatrix} -1 & -1 & -1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & 1 \end{pmatrix} \text{とおくと } P^{-1} = \begin{pmatrix} -1 & -1 & 0 \\ -1 & 0 & -1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix} \text{であり}$$

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 3 \end{pmatrix}$$

と対角化できる。

$$(3) \quad A = \begin{pmatrix} -1 & -2 & -1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 2 & 2 & 2 \end{pmatrix} \text{とおく。固有方程式は}$$

$$\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^3 - 3t^2 + 2t = t(t-1)(t-2) = 0$$

なので、固有値は $0, 1, 2$ である。よってこの問題でも \mathbb{K} が実数か複素数かを区別する必要はない。

$$0 \text{ に対応する固有ベクトルを } x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \text{ とすると,}$$

$$-x - 2y - z = 0$$

$$x + 2y + z = 0$$

$$2x + 2y + 2z = 0$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ 0 \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$$x = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ を選ぶことができる。}$$

$$1 \text{ に対応する固有ベクトルを } x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \text{ とすると,}$$

$$-x - 2y - z = x$$

$$x + 2y + z = y$$

$$2x + 2y + 2z = z$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ x \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$$x = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} \text{ を選ぶことができる。}$$

2 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$-x - 2y - z = 2x$$

$$x + 2y + z = 2y$$

$$2x + 2y + 2z = 2z$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ x \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。

$$P = \begin{pmatrix} -1 & -1 & -1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & 1 \end{pmatrix} \text{ とおくと } P^{-1} = \begin{pmatrix} -1 & -1 & 0 \\ -1 & 0 & -1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix} \text{ であり}$$

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}$$

と対角化できる。

(4) $A = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$ とおく。 $0 \leq \theta < 2\pi$ の範囲で考える。 $\theta = 0$ のとき $A = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$

なのですでに対角行列になっている。また $\theta = \pi$ のとき $A = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}$ なのでこの場合もすでに対角行列になっている。よって以下 $\theta \neq 0, \pi$ と仮定する。固有方程式は

$$\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^2 - 2\cos\theta t + 1 = 0$$

である。この 2 次方程式の判別式は負なので実数解を持たない。よって $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ のとき対角化不可能である。 $\mathbb{K} = \mathbb{C}$ の場合は $e^{i\theta} = \cos\theta + i\sin\theta$ および $e^{-i\theta} = \cos\theta - i\sin\theta$ を 2 解にもつ。

$e^{i\theta}$ に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ とすると,

$$\cos\theta \cdot x - \sin\theta \cdot y = (\cos\theta + i\sin\theta)x$$

$$\sin\theta \cdot x + \cos\theta \cdot y = (\cos\theta + i\sin\theta)y$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ -ix \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとし

て $x = \begin{pmatrix} 1 \\ -i \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。

$e^{-i\theta}$ に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ とすると,

$$\cos \theta \cdot x - \sin \theta \cdot y = (\cos \theta - i \sin \theta)x$$

$$\sin \theta \cdot x + \cos \theta \cdot y = (\cos \theta - i \sin \theta)y$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ ix \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} 1 \\ i \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。

$$P = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -i & i \end{pmatrix} \text{ とおくと } P^{-1} = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 & i \\ 1 & -i \end{pmatrix} \text{ であり}$$

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} e^{i\theta} & 0 \\ 0 & e^{-i\theta} \end{pmatrix}$$

と対角化できる。

$$(5) \quad A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -2 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & -1 & -1 \end{pmatrix} \text{ とおく。固有方程式は}$$

$$\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^3 - t^2 + t - 1 = (t - 1)(t^2 + 1) = 0$$

である。 $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ のとき固有値は 1 のみで、重解でないので固有ベクトルで 1 次独立なものを 2 個以上選ぶことはできない。よって対角化不可能である。

$\mathbb{K} = \mathbb{C}$ のとき固有値は $1, i, -i$ の 3 個である。1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$x + 0y - 2z = x$$

$$0x + y + 2z = y$$

$$0x - y - z = z$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。

i に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$x + 0y - 2z = ix$$

$$0x + y + 2z = iy$$

$$0x - y - z = iz$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ x \\ \left(\frac{-1+i}{2}\right)x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベク

トルとして $x = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ \frac{-1+i}{2} \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

$-i$ に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると,

$$x + 0y - 2z = -ix$$

$$0x + y + 2z = -iy$$

$$0x - y - z = -iz$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} -x \\ x \\ \left(\frac{-1-i}{2}\right)x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベク

トルとして $x = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ \frac{-1-i}{2} \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

$$P = \begin{pmatrix} 1 & -1 & -1 \\ 0 & 1 & 1 \\ 0 & \frac{-1+i}{2} & \frac{-1-i}{2} \end{pmatrix} \text{とおくと } P^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & \frac{1+i}{2} & -i \\ 0 & \frac{1+i}{2} & i \end{pmatrix} \text{であり}$$

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & i & 0 \\ 0 & 0 & -i \end{pmatrix}$$

と対角化できる。

(6) $A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & a & 1 \\ 0 & 0 & b \end{pmatrix}$ とおく。固有方程式は

$$\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^3 - (a+b+1)t^2 + (a+b+ab)t - b = (t-1)(t-a)(t-b) = 0$$

なので、固有値は $1, a, b$ である。この問題は \mathbb{K} が実数か複素数かという場合分けは必要ないが、定数 a, b の条件による場合分けが必要になる。計算を実行してみると分かるが、 $a - 1$ や $b - a$ 等で式を割りたい場合が発生する。そこで割算を実行できるための条件 $a - 1 \neq 0$ や $b - a \neq 0$ 等が必要になる。

最初に $1 \neq a \neq b \neq 1$ の場合を考える。1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると、

$$\begin{aligned} x + y + 0z &= x \\ 0x + ay + z &= y \\ 0x + 0y + bz &= z \end{aligned}$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして

$x = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

a に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると、

$$\begin{aligned} x + y + 0z &= ax \\ 0x + ay + z &= ay \\ 0x + 0y + bz &= az \end{aligned}$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ (a-1)x \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトル

として $x = \begin{pmatrix} 1 \\ a-1 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

b に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とすると、

$$\begin{aligned} x + y + 0z &= bx \\ 0x + ay + z &= by \\ 0x + 0y + bz &= bz \end{aligned}$$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ (b-1)x \\ (b^2 - ba - b + a)x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有

ベクトルとして $x = \begin{pmatrix} 1 \\ b-1 \\ b^2 - ba - b + a \end{pmatrix}$ を選ぶことができる。

$$P = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 0 & a-1 & b-1 \\ 0 & 0 & b^2 - ba - b + a \end{pmatrix} \text{とおくと } P^{-1} = \begin{pmatrix} 1 & \frac{1}{1-a} & \frac{a-b}{(1-a)(b^2 - ba - b + a)} \\ 0 & \frac{1}{1-a} & \frac{b-1}{(1-a)(b^2 - ba - b + a)} \\ 0 & 0 & \frac{1}{b^2 - ba - b + a} \end{pmatrix}$$

であり

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & a & 0 \\ 0 & 0 & b \end{pmatrix}$$

と対角化できる。

$a = b$ のとき a に対応する固有ベクトルで 1 次独立なものを 2 個選ぶことができないので対角化不可能。よって $a \neq b$ とする。

$a = 1$ のとき 1 に対応する固有ベクトルで 1 次独立なものを 2 個選ぶことができないので対角化不可能。 $b = 1$ のときも同様に対角化不可能である。

演習問題 5.6 演習問題 5.3 の行列に対し $\mathbb{K} = \mathbb{C}$ の場合と $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ の 2 つの場合に対角化を試みよ。対角化不可能な場合は理由も述べること。

(1) $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とする。演習問題 5.4 のとき求めた様に A の固有値は 1 のみであり

4 重解であるが、それに属する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} x \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしており、1 次独立なものは 1 個し

か選べない。 A が対角化できる必要十分条件は 1 次独立な固有ベクトルが 4 個存在する事なので、 A は対角化不可能である。

(2) $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とする。最初に $\mathbb{K} = \mathbb{R}$ の場合を考える。固有値は 1, -1 の 2 つであ

り、1 に属する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} x \\ x \\ x \\ x \end{pmatrix}$, -1 に属する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} x \\ -x \\ x \\ -x \end{pmatrix}$ の形をしている。

1 次独立な固有ベクトルは、例えば $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$ の様に 2 個しか選べない。 A が

対角化できる必要十分条件は 1 次独立な固有ベクトルが 4 個存在する事なので, A は対角化不可能である。

次に $\mathbb{K} = \mathbb{C}$ の場合を考える。演習問題 5.4 のときに求めた様に $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix},$
 $v_3 = \begin{pmatrix} i \\ -1 \\ -i \\ 1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} -i \\ -1 \\ i \\ 1 \end{pmatrix}$ は 1 次独立な固有ベクトルである。 $P = \begin{pmatrix} 1 & -1 & i & -i \\ 1 & 1 & -1 & -1 \\ 1 & -1 & -i & i \\ 1 & 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$

とおくと P は正則で, $P^{-1} = \frac{1}{4} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ -1 & 1 & -1 & 1 \\ -i & -1 & i & 1 \\ i & -1 & -i & 1 \end{pmatrix}$ となり,

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & i & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -i \end{pmatrix}$$

となる。

(3) $A = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とおく。演習問題 5.4 で求めたように $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix},$
 $v_3 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ は 1 次独立な固有ベクトルである。 $P = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}$ と

おくと P は正則で, $P^{-1} = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 0 \\ -1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & -1 & 1 & 0 \end{pmatrix}$ となり,

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \end{pmatrix}$$

となる。